

新建築

SHINKENCHIKU:2017

9



猪名川霊園礼拝堂・休憩棟

設計 デイヴィッド チッパーフィールド アーキテクト (基本設計・デザイン監修)
キー・オペレーション (アソシエイトアーキテクト)
大林組 (実施設計)

施工 大林組

所在地 兵庫県川辺郡

INAGAWA CEMETERY CHAPEL AND VISITOR CENTRE
architects: DAVID CHIPPERFIELD ARCHITECTS

北側から見る全景。兵庫県の北摂山系に位置する猪名川霊園につくられた、来園者のための礼拝堂、休憩棟、職員用事務室などを持つ施設。斜面の傾斜に沿った1枚の片流れの屋根の下に各機能が配置されている。

東から見る俯瞰。礼拝堂・休憩棟からおよそ110m上がった霊園の頂点に納骨堂が建つ。山頂からは暗渠を伝って水が流れており、その一部を今回地上化し、水路として新たにデザインされた。敷地の両極を結ぶ階段の中央を流れる水は、いったん水盤に貯まった後、建物東側に位置する小川へと流れる。



エントランスの水盤越しに納骨堂を見る。この建物は、霊園への「ゲートウェイ」としての役割も持つ。

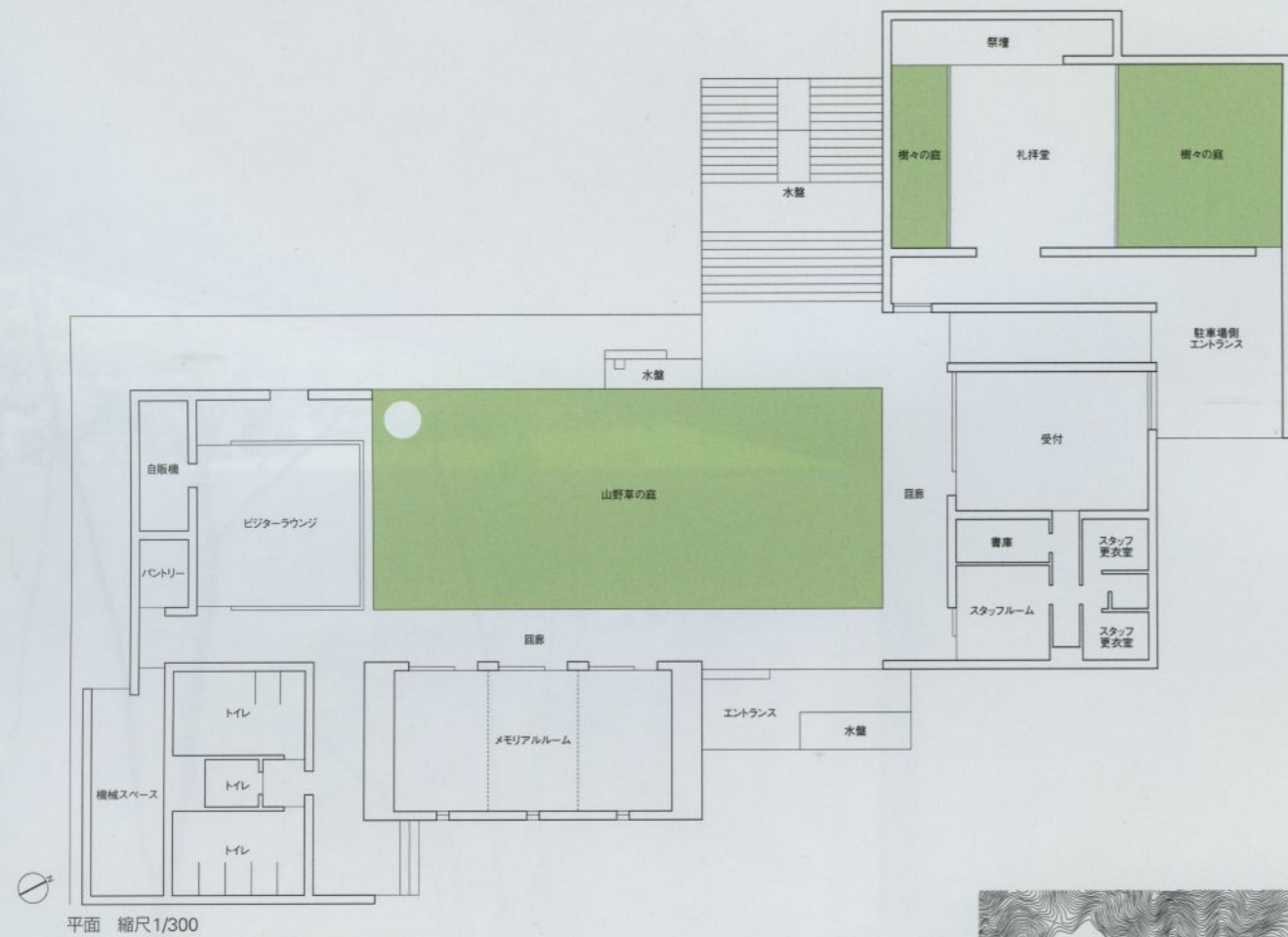




礼拝堂内観。祭壇方向を見る。左右に「樹々の庭」が配置されている。庭を囲むように上部の開口した外壁が立ち上がることで、外との繋がりを保ちながらも内向的な空間になっている。祭壇へはハイサイドライトから自然光が落ちる。木製椅子など家具はすべてデイヴィッド・チップバーフィールド・アーキテクトによるデザイン。



左：トイレ入口の壁の近景。壁の厚みは380mm。中：礼拝堂前の廊下からエントランス方向を見返す。右：礼拝堂前廊下の突き当たりには、「山野草の庭」に面した開口部とベンチが設けられている。



設計 建築 デイヴィッド チッパーフィールド アーキテクト (基本設計・デザイン監修)
 キー・オペレーション (アソシエイトアーキテクト)
 大林組 (実施設計)
 構造 大林組
 佐藤淳構造設計事務所 (構造設計コンサルタント)
 設備 大林組
 イーエスアソシエイツ (設備設計コンサルタント)

施工 大林組
 敷地面積 144,477.28m²
 建築面積 631.08m²
 延床面積 493.08m²
 階数 地上1階
 構造 鉄筋コンクリート造
 工期 2016年3月～2017年4月
 撮影 新建築社写真部
 (データシート203頁)



建物北東部に配置された礼拝堂への専用エントランス。周囲の緑に溶け込むような赤土色の顔料を混ぜ入れて着色されたコンクリートは、ひとつの岩の塊のように見えるため、外部に面したすべての面がサンドブラスト仕上げを施されている。

土地に根差した建築

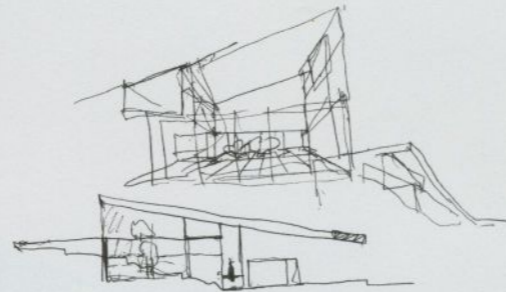
猪名川霊園は、大阪市から北へ約40キロに位置する、兵庫県北摂山系の急斜面に建つ。雞壇状に構成された霊園の中央を貫く1本の階段。その頂上に納骨堂が建つ。この階段のラインの延長線上、納骨堂と対極をなす地点に、中庭を取り囲むように来園者の祈りと休憩のための空間を配した。遺族や来園者のための礼拝堂・休憩棟と受付や事務室で構成されたプログラムはシンプルであるが、スピリチュアルな機能と実務的な機能が同居しているという点において、構成に複雑さを与えている。われわれは、それぞれの機能を独立させるのではなく、共通のコンセプトを持たせるべきだと考えた。さらに、霊園への入口であるということが、もうひとつの重要な機能であった。したがって、中庭を中心としてスピリチュアルな機能と実務的な機能を繋ぐ「センター」でありながら、霊園、そしてその先の山々へと繋がる「ゲートウェイ」として、この建物は構成されている。

建物は、すべての機能を一枚の片流れの屋根の下に収めており、そのラインがエントランスから納骨堂を見上げた時の視線に沿うように構成されてい

る。休憩棟の各部屋は中庭に開かれている一方で、礼拝堂は中庭から切り離されている。礼拝堂へは専用通路で外から直接、あるいは中庭から伸びる緩やかな斜路を上がって到達することができる。最小限の暖房と照明しかない無垢で静謐なこの部屋は、宗派を問わない純粋な祈りの場である。両側の庭から間接的に射し込む自然光を頼りとし、外界から遮断されることで、刻々と変化する光や四季の移り変わりが刻む自然のリズムへと感覚が研ぎ澄まされていく。

純粋な建築のエレメントとしてかたちづけられた床、壁、屋根は、いずれも赤土色に着色したコンクリートを素材としている。当初は日本の伝統的な建築を参照し木造とする案も考慮したが、素材や形状ではなく、その空間性を取り入れたいと考えた。そこで日本建築の特徴は内と外のシームレスな繋がりでと捉え、ファサードから屋内まで建物全体をひとつの岩の塊のように見せることができるコンクリートを選択した。コンクリートは必要に応じて断熱されており、内部の床は磨き仕上げ、回廊の壁と軒下はサンドブラスト仕上げを施している。また、周囲の山々の緑と調和する自然の素材のよう

な色を求め、現場で何度も実験を繰り返し、赤土色にたどり着いた。中庭、そして礼拝堂のふたつの庭は、ランドスケープアーキテクトと協働して設計された。霊園のランドスケープ、そして周囲の山々を中庭の借景として取り入れることで、建築をこの場所に根付かせている。山からの水は、敷地の両極を結ぶ軸線ともなっている急斜面の階段の中心を建物に向かって流れる。そして、礼拝堂の脇に位置する階段の麓で速度を緩めて水盤にいったん貯まり、そこから新しい地下水路に落ちて、すぐそばの小川へと向かう。(デイヴィッド・チッパーフィールド)



チッパーフィールドによるコンセプトスケッチ

植栽でつくり出す建築の表情

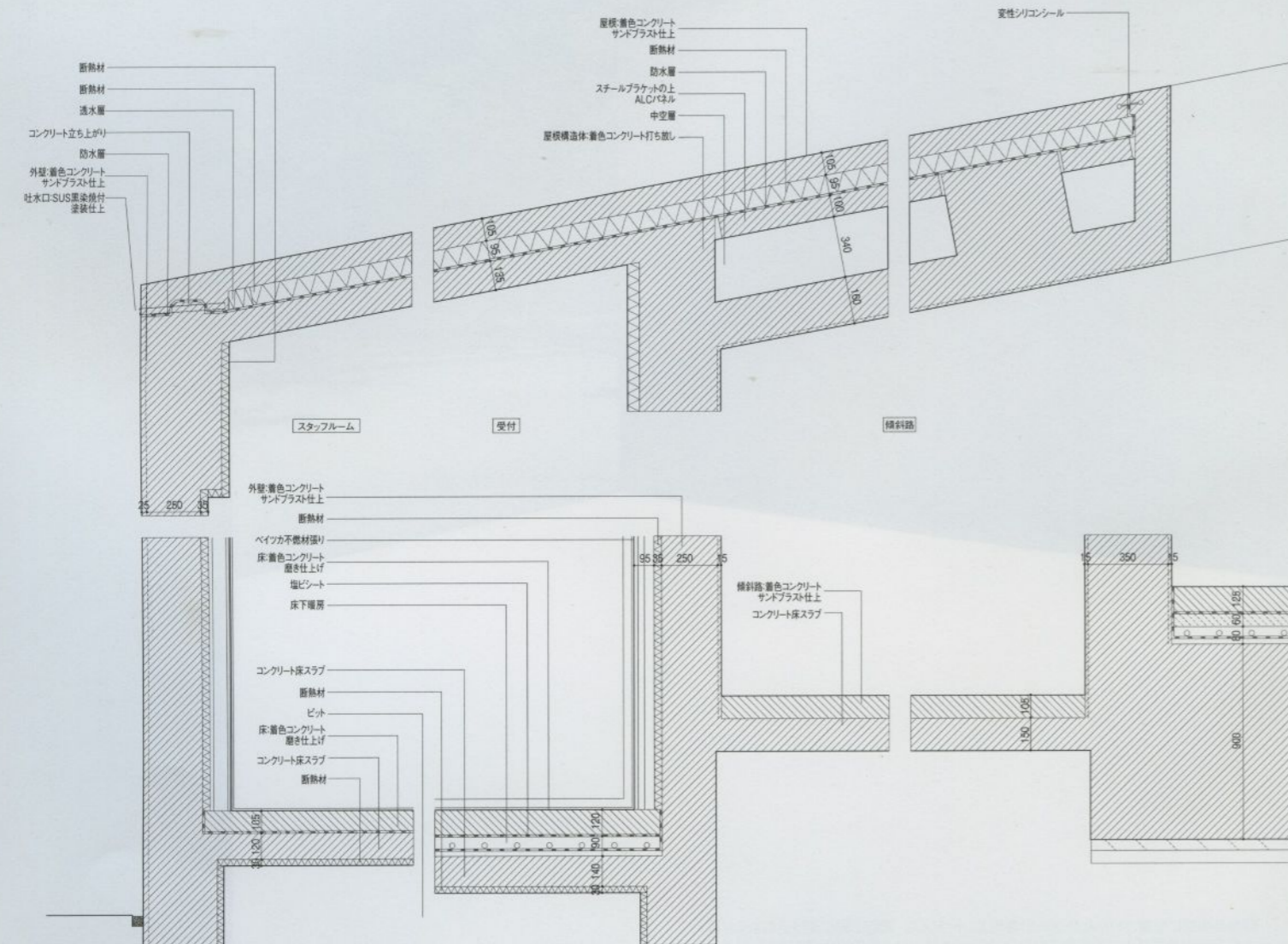
「庭園はこの建築の中心であり、木々に囲まれた霊園の核をなすものである」。ランドスケープ・デザインは、デイヴィッド・チッパーフィールドが提案したこのコンセプトを出発点としている。庭園を猪名川の自然を象徴するものとしてとらえ、その自然に溶け込むような中庭を考えた。「山野草の庭」は精選した67種の草花や低木で構成しており、草花は開花時期や姿形を、低木は落葉樹の花季、黄葉・紅葉や落葉後の樹形と常緑樹の精気に満ちた姿とのバランスを念頭に置き、四季の移り変わりを感ぜられるように緻密に配置した。彩り豊かな「山野草の庭」とは対照的に、礼拝堂の庭は故人を偲び、その想いを振り返り、祈りをささげる場として静謐な「樹々の庭」とした。参拝者が着席した時、目線に映る木として幹に豊かな表情を持つ、猪名川の森に自生するアオダモの木を選んだ。背景には常緑樹のハイノキを配置した。足元はカモジゴケとイノモトソウで覆い、春先にはニリンソウの白い小さな花の絨毯が見られるよう設計している。(岩立マーシャ+上村景観設計)



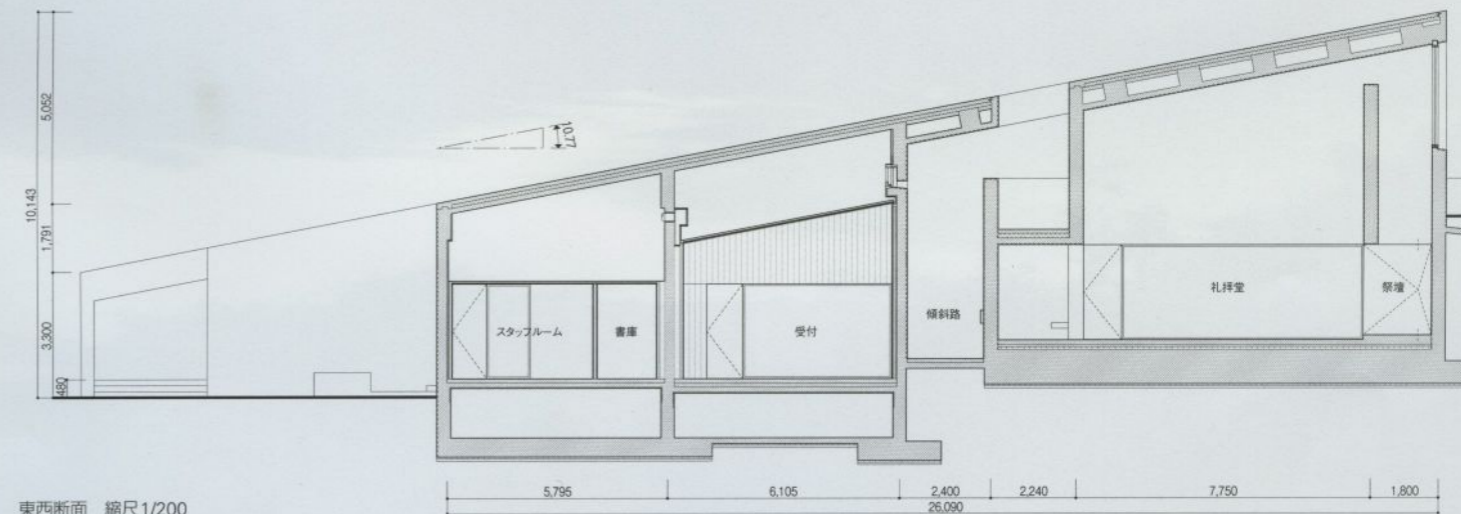
上：メモリアルルームから山頂方向を見る。法事後の会食に利用されるこの空間は、布に和紙を重ねた屏風式のカーテンで3つの部屋に仕切ることができる。下：ビジターラウンジから「山野草の庭」を見る。

コンクリート打設における工夫

サンドブラストの表面の仕上げを考慮して、このプロジェクト用に開発した頭の小さなセパレーターやコンクリート製のスベサーを使用した。また打設において骨材分離を防ぐために、やわらかい特殊な圧送ホースを使用し、コンクリートの充填状況を確認するために部分的にアクリルの透明パネルを型枠とした。ブラストにおいては、削り厚さによって骨材の現れる表情がまったく異なるため、削り厚さをモックアップで何度も検証した。(駒井孝昭/大林組)



断面詳細 縮尺1/30



東西断面 縮尺1/200